

オ三回科学者京都会議 アピールの次草案

最近、わが国においても、核兵器の本質が見失われようとする傾向があらわれてきた。これは一面では、今日の国際的な政治情勢と核兵器開発の現状についての皮相的観察にもとづくものであろう。たしかに、原子砲などいわゆる小型戦術核兵器は、ある国々では、すでに常備兵器として部隊編成に組み込まれており、水爆搭載のB52爆撃機の衝突事故が明らかにしたように、大型戦略核兵器はほとんど地球の全域にわたって晝夜実戦配置に行っている。また核保有国は核兵器開発を今なお懸命に行っている。

しかし、いうまでもなく、核兵器は核エネルギーを用いた兵器であり、通常兵器とはそのもたらす効果において、質、量ともに大きく異なるものであり、いかにその技術的開発が進んでも、通常兵器と連続的につなばることはない。装置の小型化が化学エネルギーの百万倍をこえる核エネルギーの矮小化をいみしないこと、および、核兵器の効果から放射能を除去すること

の原理的不可可能性は明白である。しかも、装置の小型化は、むしろ核兵器開発の後期において始めて可能なのである。

それゆえ、いかなる核兵器の使用も許されてはならないし、そのため、核兵器の全面廃棄は何を措いても実現されなくてはならない。全面核戦争の危険は蓋然性の大小の問題ではない。<sup>を論ずるというふうな</sup>核戦略体制に内在する核戦争の可能性を根元的に除去することが最も必要である。この意味で、現在をおとらいつつある核強大国の抑止政策は、あらゆるためてきびしく非難されなくてはならない。

ひるがえつて考えると、一国の安全保障を、その国がいかなる外国からも武力による威嚇あるいは攻撃をうけぬような政治的状態を武力によつて保持することであるとしても、日本が核武装することは、日本の安全保障には有害無益である。右にのべた目的にかなうような核兵器開発は、日本の産業全般にわたる大規模

な軍事化なしには可能ではないが、これが始められた  
ならば、経済的にはもちろん、日本の科学研究の将来  
に別り知れない禍根を残すことになるであらう。又、  
日本自身が核兵器の管理権をもたず、他国の核戦略体  
制に組み込まれ、それに依存することは、軍事的にみ  
ても日本の安全保障と両立しないところか、自らを危  
殆にさらすことにならざるをえないのである。  
われわれがオ一回会議以来主張してきた、日本の核  
非武装こそ日本、ひいてはアジアの平和のための必要  
不可欠の条件であるという原則は、現実政治の観念に  
立つても、ますますその有効性を強めてきているとい  
うことができる。われわれは、ここでとくに、沖縄に  
おかれている米合衆国の核基地に対し、深刻なる注意  
を喚起しなければならぬ。日本政府が沖縄の核基地  
を容認し、他国の核戦略体制下に入つたままで、日本  
の核非武装を言明することは、自他に対する欺慢であ  
り、正に政治の退廃というべきであらう。政治の退廃

の戦争を招来する危険をはらんでいることは、歴史の示す通りである。

われわれは、広島、長崎の原爆被災後二十一年を経  
て、最近、核兵器是認の動きが、種々の假面をおびつ  
て現われて来たことを憂慮し、日本国民の世界平和に  
対する歴史的役割を再考することを、平和を求めます  
べての人々に訴える。日本が自らの完全な核非武装の  
実施に、真摯な努力を傾けるとき、全面軍縮を始めと  
する平和時代の創造への鍵はわれわれの手にあるであ  
ろう。

一九六三年六月十九日 (予定)

附記

余り遅くなつてほと一応オの草案をつくり  
ました。全体はわたつて、あるいは細部につい  
て加筆修正下さい。そしてひきまら  
三月中旬に御返送下さい。

三月十九日

豊田